

栃 木 県

書道連盟

会 報

第 19 号

栃 木 県 書 道 連 盟
 会 長 重 原 聖 鳥
 321-3426 貝 町 赤 羽 2 7 2 5
 芳 賀 郡 市 民 会 館 1 階 2 号 室
 TEL (0285) 68-0600
 編 集 事 務 局
 編 輯 長 中 野 永 峰
 321-0132 宮 城 町 6-1-48
 宇 都 宮 市 民 会 館 2 階 2 号 室
 (会 計) 癸 生 川 天 遊
 TEL (028) 655-2888
 印 刷 株 宮 本 印 刷

今こそ 大同団結を

重原 聖鳥

西暦二千年、新しいミレニアムを迎え会員が大同団結して「会員相互の研鑽、親睦」を主柱に会員各位の声を傾け、心からの協力を賜りながら活動を展開してまいりたいと考えておりますのでよろしくお願い致します。

流派、社中、書道観、人生観等各々に異なるところでありますが、プラス志向で研鑽・親睦を一層深めようではありませんか。

平成十一年度の活動を振り返り次年度へのステップにしたいと思ひます。

五月 総会、講演会、会員展
 会員展出品点数三七四点（前年より十三点増）講演会講師
 藍菊会理事長清水透石先生単独
 選考により連盟賞・古舟賞に、
 兼目悠久・腰塚藤翠・菅俣青洋
 の三氏が受賞。
 講演会出席者二百五名。テ

マ「私の古筆観」。古筆の勉強方法を丁寧にわかりやすく説明され受講者を魅了した講演会であった。

七月 研修旅行
 ソウル二泊三日の旅。参加者十六名。市内観光（景福宮と国立民俗博物館）。板門店観光。本場カルビ食べ放題で酒宴も盛大であったと聞く。自由行動では、財布のひもをゆるめて買い込んだとか、見聞を広め、親睦を深めた旅であったとの報告。

九月 県芸術祭書道展
 書道部門は、近年増加の一途をたどっておりましたが、十一年は、公募数三七五点（前年度四五四点）で七九点減。入選二二六点で入選率六〇・三パーセント。原因は、入選率の厳しさにあると考えて、その対策に苦慮しているところ。妙案をお聞かせ下さい。
 二月 女流展

十六回展。出品点数百七十三点（前年より四点増）の出品があり、運営等も女流の方々で進められており本連盟の行事の一つの柱として定着してきましたことは非常に喜ばしいことと思っております。

批評会講師には、本連盟副会長鈴木源泉先生を迎えて、和やかな雰囲気の中に進められ、多くの会員が出席して盛会でした。

二月 実技講習会
 総会時の講演会に続いて、藍菊会理事長清水透石先生をお迎えして、「仮名基本の学習と鑑賞法」のテーマで開催しましたところ百八十六名の出席があり、ホテル丸治の会場は、超満員となり、十分筆をとることができず講師先生をはじめ会員の皆様に大変ご迷惑をかけ申し訳なく思っております。
 日程、交通便、墨を使用すること等考えまして会場確保に事

務局は頭を痛めております。何か妙案がありましたらお聞かせ下さい。

二つの受賞祝賀会

塚原秀蔵先生毎日展会員賞
 川上鳴石先生読売新聞社賞
 両先生祝賀会が、十月十一日栃木県青年書作家協会主催により宇都宮ホテルニューイタヤで開催され、多くの同志が出席して盛会でした。本県書壇の前途に光明を感じるとともに両氏に続く青年書家の誕生を熱望してやみません。

中井史朗先生栃木県文化功勞者受彰

本連盟顧問・毎日展名誉会員、素心社主宰などを通して、本県書壇の大先輩として後進の育成に尽くされる先生の受彰祝賀会が、本連盟、独立書人団栃木支部、素心社共催により十二月十二日宇都宮ロイヤルホテルで、県内文化人、書家多数出席して盛大に開催されました。

書道界からの受彰は、昭和五十年の故石川木魚先生以来二十四年ぶり。本連盟にとりましても大きな喜びであり、先生ご自身のお喜びは計り知れないものと推察します。

会員お一人お一人の声を耳を傾け、規約の見直し、役員組織の改組など十分検討して、よりよい本連盟に発展させようではありません。会員各位のご理解とご協力を切望します。

平成十二年度役員

会 長 重原 聖鳥
 副会長 酒井 真沙
 " 中野 永峰
 " 鈴木 源泉
 役員名簿12頁参照

平成十二年度事業計画

◇会員展
 平成十二年五月十九日(金)～
 二十二日(月)X
 県総合文化センター
 第三・四ギャラリー

◇総会
 平成十二年五月二十一日(日)
 県総合文化センター
 リハーサル室

◇講演会

総会の後同会場にて
 講師 田宮 文平先生
 演題 二十一世紀の書の展望

◇研修旅行

未 定

◇県芸入賞入選者のつどい
 平成十二年十月十三日(金)

◇実技講習会

平成十三年二月か三月

◇女流展

平成十三年二月二十四日(土)～
 二十七日(火)X
 県総合文化センター
 第四ギャラリー

平成十一年度

講演「私の古筆観」

期日 平成十一年五月十六日(日)
会場 県総合文化センター
講師 清水 透石先生
日展会員・大東文化大学教授

○仮名文字の起源

奈良時代、万葉集編纂に用いられたのが万葉仮名である。これは、五・六世紀の頃すでに伝来していた漢字を借りて表音文字として使われたものである。これは、それまでの伝承文字における「口誦」の可能性の限界からくる必要性により生まれたものであった。この万葉仮名から、時代を経、多くの人の労により平安時代以降に見られる仮名文字が形成された。

○古筆について

平安時代から鎌倉時代にかけての仮名の名品を「古筆」という。我国では漢字による古典と比較してこの古筆がより数多く残されている。次に、時代順にその主なものを挙げる。

・「継色紙」―これは古い文字も多く使われ、「老蒼古雅」の感をもつと言われる。伝承作家は小野道風である。

・「高野切」―これには一種・二種・三種とある。九〇五年、古今和歌集がはじめての和歌の歌集として勅命により編まれたが、この古今和歌集を書いたものは古筆の中で最も多い。「高野切」もその一つである。これは、古今和歌集についての素養が、当時の上流社会の女性が嫁入り前につけるべき必須のものであったからでもある。

「二種」は、老練にして優雅典麗。「二種」は、當時流行したと思われる独得の書癖を持つ。作品作りのための手本としてはやや不向きである。「三種」は、明快にして繊細。字形はオーソドックスであり、書癖がないので初学者がある期間、基本を身につけるために学ぶのに適している。

・「寸松庵色紙」―古筆中、卓絶した格調の高さを持ち、線が正しく、深く、暢達し、字形も整っており、初学者から上級者まで、生涯、座右に留め置くにふさわしいものである。私も書学の糧として愛重しているものの一つである。森田竹華がこの古筆の中の特に「秋の夜はつゆこそこと」にわびしげくさむらごことにつゆのわぶれば」の一葉について述べていることは傾聴に価する。この一葉の観方については諸家の間に異論もあるが、下底に布置する結び二文字の終画が、遠く空間をへだて、上部三行を支えて放つ力学的意図までを洞察し得たその卓越した鑑賞眼は、我々に大きな感銘を与える。さらに竹華は、この一葉に見られる文字の非連続性、読み易さ、簡明さ等の技法の中に我々が応用すべき現代性をも見とることができるとなども述べている。

この古筆を何百回となく臨書した竹華のこれらのことは「寸松庵色紙」が刮目すべき名品であることを我々に改め気付けると同時に、古筆の鑑賞力の深淺が、その人のその古筆にかかわる研さんの度合いによって決まることなども示唆してくれるのである。

・「元永本古今集」―これは、古今和歌集の完本の中でもっとも古いもので、元永三年(一一二〇年頃)と年代が明記された唯一のものである。筆者は、藤原定実と推定される。そこに含まれる書ぶべきものはたいへん多く、すぐれた古筆である。私の作品作りの拠り所の一つでもある。

○作品作りについて
「ことば」を通して、自分を表現するのが「書」であるといふ言われる。

そのために、まず第一にすぐれた「表現技術」を身につけること、第二は「感性」の確立である。「感性」とは表現技術の基盤となる深い鑑識力・美意識を意味するものである。これは、表現技術を駆使しての自らの書作の実践を通して、芽生え、身についていくものである。「書く技術は教えることができるが、鑑賞眼は教えられない。」これは今関脩竹がよく言っていたことばである。これは感性が自らの技術の練磨と相まって育てられていくことを示されたものである。



は「古筆」の中に答えを見出すことがたいせつであること、「古筆」による学習が最善のものであると確信することなども説いている。

私も長年古筆研さんに努めてきた。その過程で得た多くの資料のエッセンス(仮名と調和する漢字に関するものなども含め)をまとめたのが、はじめに紹介いただいた私の著書の一つである「かな表現字典」(二玄社)である。諸氏の書学に資することができれば幸いである。

※以上、清水透石氏の講演の本論の骨子のみ略記した。これに前後し、あるいは、付随しての学識豊かで、興味深い、具体的内容の多くを紙面の都合で割愛せざるを得なかったのは残念である。

腰塚 藤翠記

平成十一年度連盟古舟賞

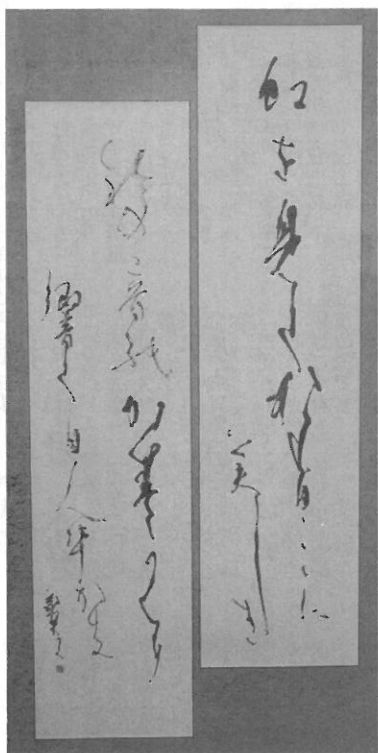
腰塚 藤翠

俳句二句を半切二枚に書いてみました。

拙い作品にもかかわらず、連盟古舟賞受賞の榮に浴させていただき、いつその精進を期せよとのあたたかい励ましをいただいたものと深く感謝申し上げます。

ふだん、大字仮名作品制作にあたり、気骨のある線を、そして、漢字作品の中にあっても見劣りしない重厚感をなどと心がけていますが、この作品の場合、その心づもりがやや優り過ぎたかなと反省をしております。

今後は、この受賞を機に、大字ではあっても、仮名作品ならではの美の独自性を求め、その表現のための試行錯誤をたゆまず続けていきたいと思ひます。今後ともさらなるご指導をお願い申し上げます。

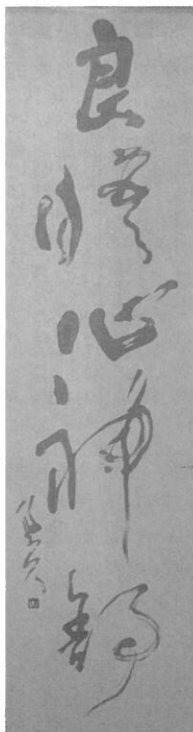


兼目 悠久

この度、はからずも榮えある栃木県書道連盟古舟賞をいただき、感謝感激致しております。

これも偏に、選に当たられました清水透石先生のご厚情と、日頃ご指導ご鞭撻をいただいている書道連盟の皆様のお蔭によるものと、心からお礼申し上げます。次第でございます。

これからも、明るく渾厚な書の表現を心掛けて精進致しなく思ひますので、今後とも何とぞご指導のほどお願い申し上げます。ありがとうございます。



菅俣 青洋

この度思いがけず連盟古舟賞という大きな賞を載き驚きと共に感激しております。

これも常日頃よりご指導いただいております師、書友、それに家族の協力のお陰と感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも小さな発見、小さな感動を求めて好きなこの道を歩み続けて行きたいと思ひます。

今後共よろしくご指導の程お願い申し上げます。



栃木県書道連盟会員展によせて

中野 永峰

全期 平成十一年五月十四日

会場 (金)十七日(月) 栃木県総合文化センター

第三・四ギヤラー

出品点数 七四一名

漢字 (前年より二点増) 二四八点

かな 五三三

少字書 三七七

近代詩文書 二四二

篆刻 一三二

栃木県書道連盟古舟賞審査員

日展審査員・大東文化大学教授

清水透石先生

受賞者 (三名)

○兼目悠久氏 (鹿沼市) 「良晤

心神怡」

清水先生評 「行草体、淡墨

作。心の高まりにより大胆、

注意深く書き放っている。

構図も見事に計算、ペテラ

ン、無駄饒舌なく、落款に

至るまで、余白美しい。」

○腰塚藤翠氏 (栃木市) 「虹を

清水先生評 「草書二行作。草原を馬で疾走するような勢いがある。大きい。気合いに満ちている。美しい余白、全体から真摯さが伝わってくる。」

ご受賞の皆さん、誠にありがとうございました。益々の筆硯ご多幸をご祈念申し上げます。次第です。

さて、私も会場を幾度か廻りました。

漢字作では、初心者と思われる方が多く見られ、大変心強く感じました。恥ずかしがらないで、どんどん出品することが上達の早道です。前向きに進む外ありません。いつも思うことですが、世阿弥の言葉を引用させていただきます。

「上手にもわるき所あり。下手にもよき所、必ずあるものなり。これをみる人もなし。主もしらず。上手は名をたのみ達者にかくれてわるき所知らず。下手はもとより工夫なれば、よき所のたまふあるをわきまへず。されば、上手も下手も、たがひに人にたづぬべし。」

初心不可忘

時々初心不可忘

老後初心不可忘

老後の初心忘るべからず

初心者の作品は、童子のように新鮮で、その天真さや、新鮮さ、ういういさに打たれます。ペテランの作品にも、初心が大切で、マンネリズムが大敵かと思われれます。「美は、一瞬の宗教である」の語に打たれています。

かな作品は、漢字作に比べて大変少ないので、日頃からかな作家の人口の増加を念願しています。しかし、光った作品が沢山ありましたし、質的に高く、会場効果を一段と上げていました。短歌や、俳句を素材とし、日本の伝統的なお家芸として、美しい料紙や、本質的に典雅流麗な線美による抒情性が奥床しく、卒直、明朗、清韻、閑雅、風流であるためと思われれます。

少字書は、禅機や、精霊的古代文字の造形化を背景とするので、格別に集中力が重大であります。これこそ、技法三分、気力七分で、素材への情念が高まらねば、無機質で、駄作になること必定です。「深は新なり」の語を目指したいと思ひます。

近代詩文書は、歴史が浅いのですが、時代性をもって今後、益々の期待の分野です。読み易さを前提として、漢字とかなを両立させるむずかしい分野で、中々格調の高い芸術性を出すには至難です。現代性ということで、特に青年層に多くの出品者が見受けられ、心強く思われました。素材の詩文により、作品形体や上張りの配色が合わないと思ひます。

(正)

題名	春望 杜甫詩
積文	(○○詩・○○歌・○○句・○○語)
姓 号	

示例の杜甫詩のように、詩詞句作者名について、題名欄に書ききれぬ場合は、積文欄の末尾に記入してもよい。

◎素材の題名がない場合は、素材の中の核心語句を使用するとよい。

特に、注意して、毎年、正

しく書いて下さるようお願いいたします。

地区出品状況

参考までに、出品目録により、市町村別に調査し、五人以上の出品地区につき記載いたします。

宇都宮市	一七〇点
高根沢町	二〇点
大田原市	一五五点
河内町	一五五点
真岡市	一五五点
矢板市	一五五点
上三川町	一五五点
大平町	一五五点
栃木市	一五五点
小山市	一五五点
西那須野町	一五五点
黒磯市	一五五点
氏家町	一五五点
日光市	一五五点
茂木町	一五五点

この他に、四点以下では二七地区から作品が寄せられました。

会員展は、会員相互の書道研究発表の場であり、親睦の機会でもあります。

本展の益々の発展を祈念致して止みません。

平成十一年度 県書道恒例の研修旅行

大谷津 昭男

今年度の栃書連研修旅行は、七月二十五日(日)から二十七日(火)までの三日間、「ソウル二泊三日の旅」が実施されました。

今回の旅は、会員相互の親睦の他、韓国の国立民俗博物館、板門店見学、グルメ、ショッピングなど盛り込まれました。参加者十六名(男、十一名、女、五名)出発二日前、歴史的大事件が生じました。航空機ハイジャック長島機長の死、あまりにも悲惨な事件でした。エアポート内での乗降時のチェックが通常よりまさしく慎重におこなわれ、かなり時間がかかりました。

第一日目(7/25日)

宇都宮駅前発、午前六時四十分、成田空港着、午前九時二十五分、フライト、午前十一時二十四分、金浦空港着、午後一時二十分、フライト時間、約二時間程度、金浦空港からバスに乗り、通訳孫順泳さんの案内でソウル市街をとり、景福宮に到着、朝鮮王朝を建国した李成桂が一九三九年、

都を漢陽(ソウル)に移した際に造営したのがこの景福宮で、一二〇万六〇〇〇坪の広大な敷地に二〇〇棟を超える壮大な殿閣があり、王の王宮として使われると同時に、政治の中心としての役割も担っていた。壬辰の乱で、ほとんどの建築物が焼失、現在は一〇数棟の建物が残るだけとなったが、再び元の姿を取り戻そうと、工事が進められていた。景福宮内にある国立中央博物館を見学、七〇〇〇mに及ぶ展示スペースは十八の常設展示室と二つの企画展示室で構成され、約四四二五点もの遺物を展示、予想外に立派で見応えがあった。

夕食は市内のレストラン「海鮮鍋」、日本の鍋もののよう、野菜、生ダコ、エビ、カニ、イカ、ハマグリ、ホタテ、タラなど海の幸が入って、ピリ辛の味付け、一味違った独特な美味で舌づつみ。

第二日目(7/26日)

ホテルを午前八時〇五分に出発、終日板門店観光。事前

の許可ときびしい規則があり、パスポートの他、服装、禁煙、禁酒、静粛、など説明を受けた。ソウルから約五〇km、バスで約一時間三〇分、自由の橋でバスポートのチェックを受け、米軍ジープに守られて非武装地帯へ入る。緊張感がますます高まってくる。昼食はクラブ内で兵士たちと同じメニューでバイキング。食後

休戦ラインの歴史を紹介する映画を鑑賞後、注意事項の説明を受け、「状況により訪問者の安全は保証できない」という内容書類にサインする。いよいよ軍事休戦ラインの最前線、軍事停戦委員会会議場へと向かう。室内のテーブル中央に引かれているのが38度線の境界線、南北の代表が話し合う有名なテーブル、ここで写真撮影、自由の家の展望台からは北朝鮮側の様子が見渡せる。感無量、貴重な体験であった。

夕食は市内レストラン「南山ガーデン」にて、カルビー食べ放題、牛のあばら肉、骨付きカルビーなど歯ごたえあり。ジュシーでサンチュ(サニーレタスに似た葉)などに包んで食べる。春菊、エゴマの葉など、他にキムチ、大根の和えもの、ニンニク、野菜、タマネギ、コチュジャン、食後ロッテホテルに到着。最後の夜は自由時間を、エスデ、

ショッピング、明洞散策とそれぞれ楽しんだ。明洞はソウルの中心街で、有名ブランドのブティック、アクセサリーショップ、大型デパートが集まるファッションの中心地である。飲食店の数も多く、その賑わいは地下街にまで及んでいる。

第三日目(7/27日)

いよいよ最終日、ロッテホテルを午前十三時三〇分に出発途中、仁寺洞で下車し、街並を散策、ショッピング、この街は、骨董品の専門店が集まる地域で、路地裏には純韓国風の家屋が残っており、いたる所、古美術品や伝統的な民芸品が陳列された店頭を眺めながら、一時間足らずのひとときを楽しんだ。バスに乗り、昼食は市内レストラン「巨龜荘」にて、石焼きビビンバ。熱した鉄釜の中に、ご飯、味つけされたワラビ、ゼンマイ、大根、大豆モヤシ、キノコ、野菜、牛肉など色鮮やかに入っている。熱いうちにご飯と具をよくかき混ぜあわせ、コチュジャン、たれなど好みに応じて食べる。辛さ、熱さ、栄養素がいっぱいの食事は体全体が温まり、まさに健康食である。昼食後、食品店キムチ屋で最後のショッピング、金浦空港に午後一時二十五分に到着、フライト午後三時三〇分、成田空港着

午後五時三十分、バスに乗り、成田を午後六時一〇分に出発、宇都宮到着午後九時四十五分。参加者は少なかつたが、会員同志の親睦も一層深まり、韓国の歴史と未来が共存する街の片鱗にふれ、視野が広がりました。独特の個性を持つエリア：韓国、再び訪れたい魅力いっぱい旅でした。



平成十一年第五十三回栃木県芸術祭

中井 史朗

今年度の書道部門は、昨年度より七九点の減で、やや入選がゆるやかになった。とは言え、六〇パーセントの入選率はきびしい。真剣に取組んだ制作者の作品の四割は展示されなかったという現状である。全体の傾向は、相変わらず漢字部門が圧倒的に多く、主流を占めている。漢字以外の大字書・近代詩文書・仮名書・篆刻等はそれぞれ一〇パーセントに満たない。これは、現代のあらゆる書道展の傾向でもある。然も行書か草書が圧倒的に多い。これは字書の基本的練習が漢字中心になつていことに基因する。書法の基本は、書の古典(古法帖・古筆)にあることは言うまでもない。たとえば仮名や篆刻のような分野でも、毛筆の用筆法の練習には漢字の習練なしには考えられない。よつて、大字・近代詩文は申すに及ばない。

然し、多数字数の漢字のみの展覧会は、片より過ぎていと思う。理由は、素材の理解と云う点で、長い漢詩漢文は難しい。もつと漢字の多数字数以外の分野の書にも積極的に入り組んで戴きたいというのが、審査前の感想である。審査員の七名が一番難しいと感じたのは、鑑別である。入選と落選の境目をどのようにきめるかということである。展示壁面が広ければ、それも可能であるが、書道にあて

れた壁面は栃木県総合文化センターの第四画廊の三分の二だけである。厳選であるから慎重にならざるを得なかった。作品を見て実力のよくわかるのは、署名落款だと言われる。正にその通りで、その位置や本文との調和などであるが、本年もまた、数多くの落款の拙いものがあった。特に書は、言葉を書く芸術である。誤つた字や誤つた崩し方は、書の見識が問われる。字をうまく書くことは書はよくならない。書は墨色・潤濁・空間処理等がよくなくつたならば、書作品として価値をおとす結果となる。

○芸術祭賞「鶏犬相聞」

磯 翠茗

この篆刻作品は、漢字かな等を差し置いて審査員全員一致で決定したものである。甲骨文に風趣を執り古格に満ち格調高き傑作である。造形・刀法とも抜群である。たまたつと釈文・署名は簡素にした。

○準芸術祭賞「秦系に酬ゆ」

横田 蘭花

三行ものとして、まことに見事な作である。中の行をしつかり立て、両側の行がそれを支えている。典型的な三行書の見本ともいふべき秀作である。

○準芸術祭賞「石城曉」

五江淵霊水

淡墨流麗な作で、みごとに初筆から終筆まで吹き抜けている。呼吸の長さに驚く。その為かやや平坦である。

○芸術祭奨励賞「秋はぎ」

阿久津天舞

仮名の横もの作品、まことに巧みに納めていて、心地よい調べを聴くような想いである。いわゆる序破急の妙を得た作品である。

○芸術祭奨励賞「懐」

大類 天鶴

一字書である。広い空間に一字を座らせるには、まづ氣力の充実が第一である。この作その点はみごとである。豊かな情感を抱かせる優作である。ただ起筆と終筆が、ややもの足りなさを感じさせる。

○芸術祭奨励賞「紅鶴」

赤澤 寧生

二行を大きくし、三行目を小さくして、見ごとに収まっている。造形的な美しさはあるが、「此の土には歌がある」のは惜しい。

○芸術祭奨励賞「長信宮中詠草」

大高 美砂

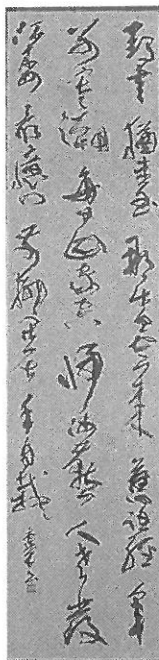
古法帖を精習して、その成果がこのような創作を生み出したものと思われる。線が清く響いている。

○芸術祭奨励賞「石川啄木の歌」



▲五江淵霊水

横田 蘭花 ▶



○芸術祭奨励賞「春の野に」

竹澤 久子

上代様(平安朝の古筆)を、うまく現代風にままとめている。線の切れ味がよい。

○芸術祭奨励賞「長岡参寥詩」

倉持 玄風

味わい深い作である。最後の三字のおさめ方が気になる。

○芸術祭奨励賞

江村詩「細小路」

洗玉

寸分ゆるぎない隸書作品。幾分樂趣に乏しい。

○芸術祭奨励賞

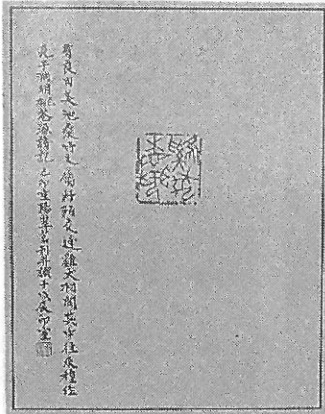
「守愚」村松 太子

線のはじけ、活力ある筆勢はみごとである。ただ字間のつまり過ぎが惜しまれる。

○芸術祭奨励賞

「嘉應無窮」嶋田 周

画の多い字を粗



磯 翠茗

密のバランスをよくまとめ上げている。

*

二十一世紀の扉がもうすぐ開かれようとしている。書芸術の展開はと想うとき、新世紀の書には、素材の意味を形に替える想像力と構築性が求められる。それは、少字書か可読性のある詩文書が遺るように思えてならない。

第十六回

栃木県書道連盟女流展

会期 平成十二年二月二〇日～二三日
会場 県総合文化センターギャラリー

今年も女流展が二〇〇〇年二月二〇日という区切りのいい日からスタートしました。受付にさりげなく飾られたひな人形が春の訪れを告げ女流展であることを主張していましたが、一七三点の出品作はどれも力作が揃いました。

初日二〇日、県書道連盟副会長の鈴木源泉先生をお招きして批評会がもたれました。

朝から雪の舞う生憎の天候ながら、十四時開始時には百名ほどの参加者があり、村田幽香さんの司会進行で、希望者五十三名の作品についてご批評いただきました。

「会場に来て始めて作品を見た私の瞬間の感想を」ということでしたが、参加者にとつては大変わかり易く指示があり「手習いより眼習い」のいい勉強の場が与えられたと思います。以下その中から紙面の都合で

中田婦美氏 よく通っている。

リズム感が一定なので速度バランスや、動きを加えて静止など工夫。野沢安喜子氏 穏やかな線で墨と調和している。きびしい線も入るとよくなる。林游李氏 基本、表現しつかりしている。思いきったところほしい。

福田千代氏 線質、明るさ、いい美的方向性に中央の雰囲気ある。

細小路光玉氏 穏やか、字間の余白の変化、構成を考えるとよくなる。

村上千津子氏 筆意あり方向性いい、変化と統一慎重になったがよく出来ている。

村田幽香氏 線、墨色調和しおもしろい、成功している。

矢内竹華氏 慣れている。筆動きの中で静止するところあるといい。

山田雅子氏 線のきれいな運筆の姿勢いい。線質の表情に変化を。

山中香葉氏 左右の余白に変化あり成功している。

線質、入筆の角度が深い。山

渡辺温芳氏 線穏やかできびしさあり、遊印効果的。「坤」など長い線の速度に工夫を。

加茂珠香氏 美的構成いい。線の方向性に変化を。

石井立聖氏 線きびしさあり、落款調和しているが切れ味に変化性を。

石川澄氏 線、まとめ方いい。墨量の変化性あると更によくなる。

石戸松波氏 「蓬」のしなどに変化を、骨力もありしかりしている。

大根田峰秀氏 いい作品だが字間の変化や字の大きさに工夫を。

古口庸子氏 いい作品。渴筆を生かしているが構成上に工夫を。

腰塚翠苑氏 構成おもしろい。動きの中に静止を。最後の止めに余韻を。

斉藤星舟氏 よく纏っているが後半異質に見える。全体の構成考え方は成功している。

斎藤美与子氏 線質、ねらいとも成功している。一字書は気力充実鍛練が要求されるが、気力の爆発を終わりにもつていく作品も見たい。

斉藤洋子氏 構成、墨色のねらいはいい。「人」の左右同じ線質や、周辺の余白に工夫を。

鈴木照華氏 率直で堅実だが落款に工夫を。最初の起筆を強く。

関口恵琴氏 渴筆生きている。落款慎重になりすぎ。渴筆の長い線に工夫を。

高梨芳苑氏 穏やかで明

々としている墨色はいいが最初の墨量少ない。さわやかな線質としての強さほしい。豊田典舟氏 字を大事に書いている墨のつけ方や字形の変化にも工夫を。

講評

「いい作品にするにはどうすればよいか」という見方で批評した。

字を見せるより作品を見せる場なので字の様式、構成を大切に。

・手習いも大切だが、より高い作品をたくさん観る眼習いが大切。心眼学習。

・書以外の芸術分野の美的刺激を受けて、引き出しをたくさんつくり書に活かす。

・作品に自己主張や個性は大切だが、出過ぎぬよう調和を大切に。そして、今までの女流展の中で最も力作が揃った十六回展だったと思う。と結ばれた。

搬入、飾りつけなど協力頂いた方々。赤澤豊氏、松本宣響氏、兼目悠久氏、高梨峰鶴氏、生沼冬情氏、谷古宇栖洞氏、本

田忠雄氏、福田紫水氏、腰塚ルイ氏、軽部楊子氏、鈴木照子氏、松島堂様、桐葉堂様、荒井雅子氏、石川子澄氏、小滝きみ氏、

斎藤美与子氏、人見翠苑氏、村

とうございました。
(文 山田雅子)



かな実技講習会開かる

恒例の本連盟主催実技講習会が平成十二年二月二十七日(日)、宇都宮市丸治ホテルを会場に開催された。主題は「かな基本の学習法と鑑賞法」。

講師は昨年五月の講演会に引き続き、日展会員・大東文化大学教授・藍筭会理事・全日本書道連盟理事および事務局長の清水透石氏。受講者約百九十名が参加する盛大な講習会となった。

開会のことは、重原聖鳥氏の挨拶、中野永峰氏による講師紹介のあと、講師挨拶に続き、講習が開始された。

やむを得ぬ諸事情から広い会場がとれず、実習は一部の受講生に限られたが、古筆の鑑賞法やその学び方、さらに現代著名作家の作風との関わりなど、講師の深い造詣に基づく講話と、見事な筆捌きによる揮毫の実演等により、参加者一同内容の濃い学習体験をすることができた。講師が多忙の中準備された OHP、スライド、古筆模型、印刷物等の豊富な資料も学習効果を大いに盛り上げた。

古筆については、高野切一・二・三種、三色紙、関戸本古今集、元永本古今集、秋萩帖、和泉式部続集切、本阿弥

切、針切などに触れ、筆者にまつわる逸話はもとより、字形、線質等の特徴、さらにそれらの学習上の留意点等についても述べられた。

例えば、寸松庵色紙については、その散らし方が実に気が利いていて、一首を四行が五行に、高低をつけ、行間は上を広く下を狭くし、扇を広げたような姿にしたものが多いこと、その中に巧まざる自然の趣があり、継色紙の散らし方とともに、かなの散らし方を具体的に解説された。また、高野切三種、蓬萊切、粘葉本和漢朗詠集等は初学に適しているが、いずれもその類型にはまってしまふことかなの中の「行書」といわれ、高度なテクニクを内包し、老蒼古雅の趣を持つ継色紙、計算の行き届いた布置と美しい字形の見える寸松庵色紙等は初学者からベテランにまで適した好手本であることなどについても述べられた。さらに、いくつかの古筆の実物に迫真する模型も展示され、写真版では味わえぬ感動を覚えることもできた。

関戸本古今集、継色紙、寸

松庵色紙等模型とはいえず、現在では容易には入手し難いものであり、その実物に逢わぬ筆跡の美しさ、料紙の雅美に接することができたことは貴重な体験であった。

実技においては、初学者のための学習上の留意点として、まずは、なるべく連綿の少ない部分を選び、一点一画によく注意して練習することから始め、次第に連綿の呼吸を理解していくことが望ましいとし、関戸本古今集における「ちはやぶるかもものまつりの姫小松万代ふともいろはかはらじ」(古今和歌集一一〇番)の筆跡をもとに、その一字一字の学び方について機器や印刷資料を用いて説明された。その中で、かな作品一般における放ち書きや連綿の効果、たて画、横画の太さの違いが漢字とかなどとは異なることや、変体仮名の「和」を字母とするものと「利」を字母とするものとの違いが一般的には同じ字形に書かれることが多いのに対して、寸松庵色紙においては画然と書き分けられていること等々についても述べられ、初学者ならずとも資するものが大であったと思われる。

また、かなの「大字学習法」の利点について説明され、「とりなく」の四文字を半紙一枚に書かれ、その運筆の実際を示された。その後の半切、全

紙、2×6、2×8等の用紙による多くの作品揮毫においては、その筆線の味深さ等一同の中からも期せずしてどよめきが起きた。

作品揮毫の中で指導された主なことは、

・古筆で身につけた字形、連綿等の彩り入れ、すなわち、古典の良さを背景に持つ創造の大切さ。

・空間を効果的に生かした条幅の行分けや各行間の呼吸、そして自然な右下方への流れ等を意識することによって落ち着きのある美しい布置を生み出すこと。

・初めの行などの中間部を幅広くして安定感を持たせることが一般的な手法であること。

・潤渇の対比、墨継ぎの効果的な位置関係を考慮することが重要であること。

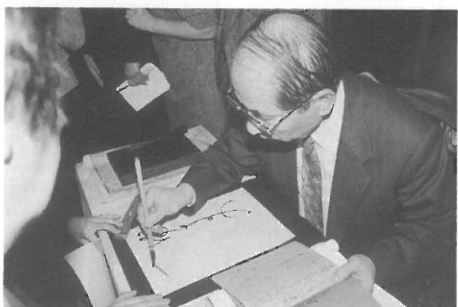
午前二時間、午後二時間、途中休憩なしの精力的な講師の指導により参加者一同充実した学習をすることができた。

紙面の都合で講習内容の多くをここで割愛せざるを得ないことが残念である。

本講習が県内の今後のかな書道のいつその進展につながることを期待される。

企画に携われた本連盟会長はじめ多くの役員諸氏の御盡力により感謝申し上げたい。

腰塚 藤翠 記



中井史朗先生の

栃木県文化功労者顕彰とその祝賀会

澤田 寛

平成十一年度の栃木県文化功労者に、中井史朗先生が選ばれた。(いっしょに選ばれたのは、馬場信雄氏)

県内はもとより、全国的に、活躍されている、栃木県書道連盟顧問の中井史朗先生は、平成十一年、十一月五日、県庁で文化功労者を受彰された。当時の渡辺知事のお話に、「本県書道界の最先端を担ってこられた」と、紹介があったけれど、正に、只今現在でも、中井史朗先生は、本県書壇、いや日本のその中で、最先端を、歩んでおられる。先生は、静岡県出身で、宇都宮に住まわれて、五十数年。その間、鈴木鳴鐸そして、手島右卿先生に師事された。

(財)独立書人団の創立会員として、四十八年間常にトップの仕事に携わり、その後、毎日書道展では、「危」により、準大賞(独立書人団の中では、最も早い受賞と、お聞きしている。)に輝き、日展でも、入選八回を重ねる。かたわら、宇都宮女子高校・宇都宮農業高校・宇都宮商業高校・再び、宇都宮女子高校・国学院短大・日本書道専門学校・東京芸術大学などで教えられ、現在は、宇都宮文星芸術大学の講師を務められている。又、毎日書道展の名誉会員、独立書人団参与、全日本書道連盟評議員と、各団体の要職にあらわれる。そして、私達の素心社を主宰され、その

指導にあけくれる日常である。

そんな超多忙な先生であるが、平成十一年は、先生にとつては、今まで長い生涯の中でも、忘れられない一年となつた。春から、体調を崩され、七月半ばから翌八月のお盆まで、入院。そして、手術…。

本当に大変にきびしいことであつたと思われる。しかし、先生の中にある強い意志力で、驚異的に快復された。

そして十月二十五日から二十七日の三日間、まだ私達の記憶に新しい本年二月の中井史朗書展の制作合宿まで、なされたのであつた。翌十一月五日の晴天の日、栃木県文化功労者を受彰された。この受彰は、本県書壇にとつても、二十四年ぶりのことで、うれしい限りであつた。

こうして受彰をお祝いする会―中井史朗先生県文化功労者受彰祝賀会―は、十二月十二日(日)、宇都宮ロイヤルホテルにて、開催された。栃

木県書道連盟・(財)独立書人団栃木支部・素心社の三者により、県文化協会々長様をはじめ、下野新聞社の方々、県内各芸術関係の先生方のご臨席を賜わり、総勢二〇〇余名の出席のもと、盛大に開催された。

今、祝賀会から六ヶ月がたつたが、その間本年二月には、「右卿賛歌」の記念すべき中井史朗書展をも開催され、現在も、益々お元気でいらしやる。

毎日書道展や、七月の素心社展の為の合宿の時などは、「八十四歳の僕が、これだけやっているんだ…、八十四歳に負けちゃダメ。頑張れ!頑張れ!」と激励された。そして又、最近では、「天保九如」の意味が、わかつたぞと言われて、ニコニコされる。本当に勉強することが、楽しくて、仕方がないといった様子。先生には、どうかお身体に充分留意されて、後に続く者

達を、お導き下さいますようお願いする次第である。

最後に一言

書道連盟会長様以下会員の皆様をはじめ独立書人団の方々、又関係各団体の皆様方には、受彰、又、祝賀会にあたり、大変にお世話になりましたことを、心から感謝申し上げます。



平成11年度 収支決算書

(単位:円)

◇収入の部

項 目	決 算 額	予 算 額	比 較 増 減	備 考
1 会費	3,630,000	3,550,000	80,000	(5000円×726名)
2 会場キャンセル料	44,300	0	44,300	県へ譲渡
3 繰越金	286,515	286,515	0	前年度
4 雑収入	756	0	756	
計	3,961,571	3,836,515	125,056	

◇支出の部

項 目		決 算 額	予 算 額	比 較 増 減	備 考
1	総会	84,152	100,000	▲ 15,848	・ 会場費等
2	展覧会費	780,657	800,000	▲ 19,343	
	会員展	593,607	600,000	▲ 6,393	・ 講師謝金、会場費等
	女流展	187,050	200,000	▲ 12,950	・ 会場費、目録印刷費等
3	会議費	710,966	680,000	30,966	
	顧問・参与会	87,528	100,000	▲ 12,472	・ 1 回
	運営委員会	225,460	150,000	75,460	・ 2 回
	幹事会	244,251	250,000	▲ 5,749	・ 4 回
	会長副会長会等費	153,727	180,000	▲ 26,273	
4	研修費	675,926	800,000	▲ 124,074	
	実技講習会	534,802	600,000	▲ 65,198	・ 講師謝金、会場費、昼食代等
	研修旅行	141,124	200,000	▲ 58,876	・ 写真代等諸雑費
5	通信印刷費	831,805	1,000,000	▲ 168,195	
	通信費	209,285	200,000	9,285	
	印刷費	622,520	800,000	▲ 177,480	
6	渉外費	220,227	200,000	20,227	
7	事務局費	134,705	150,000	▲ 15,295	
8	予備費	0	106,515	▲ 106,515	
	計	3,438,438	3,836,515	▲ 398,077	

収支決算額 3,961,571 円
 支出決算額 3,438,438 円
 差引残額 523,133 円 (次年度へ繰越)

会計監査報告

平成11年度 栃木県書道連盟 収入支出の決算について4月26日に監査した結果、
 使途・決算書・証憑等適正であることを認めます。

平成12年 5月21日

会計監査 大塚 清岳  小森 梅壽 

平成12年度 収支予算書

(単位:円)

◇収入の部

項 目	本年度予算額	前年度予算額	比較増減	備 考
1 会費	3,600,000	3,550,000	50,000	(5000円×720名)
2 繰越金	523,133	286,515	236,618	前年度繰越金
計	4,123,133	3,836,515	286,618	

◇支出の部

項 目		本年度予算額	前年度予算額	比較増減	備 考
1	総会	100,000	100,000	0	・会場費等
2	展覧会費	800,000	800,000	0	
	会員展	600,000	600,000	0	・講師謝金、会場費等
	女流展	200,000	200,000	0	・会場費、目録印刷費等
3	会議費	780,000	680,000	100,000	
	顧問・参与会	100,000	100,000	0	・1回
	運営委員会	250,000	150,000	100,000	・2回
	幹事会	250,000	250,000	0	・4回 編集会議等も含む
	会長副会長会等費	180,000	180,000	0	
4	研修費	800,000	800,000	0	
	実技講習会	600,000	600,000	0	・講師謝金、会場費、昼食代等
	研修旅行	200,000	200,000	0	・写真代等諸雑費
5	通信印刷費	1,000,000	1,000,000	0	
	通信費	300,000	200,000	100,000	・各種行事案内送付等
	印刷費	700,000	800,000	▲ 100,000	・各種行事案内印刷・会報等
6	渉外費	200,000	200,000	0	・対外団体負担金・交際費等
7	事務局費	150,000	150,000	0	・事務関係諸雑費
8	予備費	293,133	106,515	186,618	
計		4,123,133	3,836,515	286,618	

収入総額 4,123,133 円
 支出総額 4,123,133 円
 差引残高 0 円
 *その他の会計簿残額について
 1 50周年記念行事会計残額本年度 2,894,756 円
 前年度 2,891,559 円
 (利子として3,197円増)
 2 古舟賞会計残額 本年度 249,367 円
 前年度 280,573 円
 (毎年、連盟古舟賞として3万円強ずつ支出している・当初50万円)
 3 松島堂寄付金(未使用) 500,000 円

平成十一年度会務報告

九	七	五	五	四	四	四
六	二五〇二七	二〇二四	十六	二二	十八	五
幹事会 平成十一年度事業計画内容協議	研修旅行 韓国ソウルの旅 参加者十六名 出席十二名 ホテル丸治	会 場 東武宇都宮百貨店五階イベントプラザ 下野代表作家二六名 選抜一九三名 選考委員 中井史朗・小川仲秋・久津美碧洋 鈴木源泉・長嶋石城 下野書展賞 磯 翠茗・柿沼翠流・竹澤麗舟 日賀野琢・山中香葉	議 事 (1) 平成十一年度事業・決算報告 (2) 平成十年度会計監査報告 (3) 平成十一年度事業計画案・予算案審議	出 席 津久井悠山	出 席 津久井悠山	幹事会 出席 十二名 会員展・総会・講演会・懇親会の準備打合せ 運営委員会 出席三六名 平成十一年度事業報告 平成十一年度事業計画案協議 顧問・参与・会長・副会長 出席 十七名 平成十一年度事業報告 平成十一年度事業計画案審議
			出 席 津久井悠山	出 席 津久井悠山	出 席 津久井悠山	出 席 津久井悠山

九	九	十	十一	十二	二	二	二	二	九
十八〇二八	二六	十七	十一	十二	七	十四	二〇二三	二七	十八〇二八
県芸入賞入選者のつどい準備協議 (第五三回栃木県芸術祭美術展)	入賞 八名 入選率 六〇・三％ 中井史朗・小川仲秋・長嶋石城・吉田景堂・大浦舟人・赤澤 豊・久津美碧洋	運営委員 重原聖鳥 専門委員 中野永峰・酒井真沙 実行委員 松本宣響・兼日悠久・澤田幽石 日賀野琢	出 席 一四〇名 ホテル丸治	幹事会 出席十二名 実技講習会準備協議 次年度の会員展・総会・講演会・懇親会・研修旅行等協議 第十六回女流展打合せ 出席 一〇名 女流展準備 第一六回女流展	会 場 県総合文化センター第四ギャラリー 出品点数 一七七三三(前年度より四増)	批評会講師 鈴木源泉先生 実技講習会	会 場 ホテル丸治 清水透石先生 飯名基本の学習法と鑑賞法	懇親会 出席 一八六名 ホテル丸治 出席五八名	出 席 一四〇名 ホテル丸治

編集後記

平成十一年度の事業計画も皆様のお陰をもちまして各事業への参加者も毎年増加、大変充実し、しかも盛会裏に終わることができました。また各先生方にはご多忙のところ玉稿をお寄せいただきまして心より御礼申し上げます。お陰さまで第十九号会報がお届けできるはこびとなりました。平成十二年事業計画も役員一同尽力するつもりでおりますので、会員各位のご協力をお願い申し上げます。尚、それぞれの地域の書活動において本連盟と関連する記事がございましたらご連絡願います。

編集係

大谷 津紫水
柿沼 翠流
久津 美碧洋
癸生 川天遊
吉田 景堂
赤澤 豊

平成12年度 栃木県書道連盟役員一覧

	姓 号	〒	住 所	電 話
顧問	高 橋 日 僣	327-0843	佐野市堀米町 297-14	0283-23-0343
"	七 海 水 明	320-0827	宇都宮市花房 3-2-25	028-634-0622
"	中 井 史 朗	320-0818	宇都宮市旭 2-7-4	028-633-7769
"	白 石 宙 和	321-0954	宇都宮市元今泉 1-17-8	028-633-4063
参 与	新 井 幽 秋	320-0045	宇都宮市中一の沢町 5-37	028-635-0213
"	小 川 仲 秋	329-1225	塩谷郡高根沢町石末 2538	028-675-3155
"	佐 藤 堪 堪	321-0101	宇都宮市江曾島本町 14-2	028-658-2366
"	菅 又 蘆 舟	329-1222	塩谷郡高根沢町寺渡戸 578	028-676-1781
"	高 橋 竹 瑞	320-0851	宇都宮市鶴田町 1989	028-648-3606
"	津 久 井 汀 舟	320-0038	宇都宮市星が丘 2-2-42	028-622-5108
"	増 渕 春 雪	321-0934	宇都宮市築瀬 1-14-15	028-635-3321
"	田 島 芽 甲	329-1103	河内郡河内町東岡本 713	028-673-3481
"	小 滝 き み	320-0056	宇都宮市戸祭 4-14-17	028-622-7971
会 長	重 原 聖 鳥	321-3426	芳賀郡市貝町赤羽 2725	0285-68-0600
副 会 長	酒 井 真 沙	324-0057	大田原市住吉町 1-9-33	0287-22-3237
"	中 野 永 峰	321-0951	宇都宮市越戸 4-4-21	028-661-6329
"	鈴 木 源 泉	329-1221	塩谷郡高根沢町西高谷 206	028-676-1153
会 計 監 査	大 塚 清 岳	321-0169	宇都宮市八千代 1-13-6	028-658-2320
"	小 森 梅 寿	321-0165	宇都宮市緑 5-3-30	028-658-7235
事 務 局 長	赤 澤 豊	320-0065	宇都宮市駒生町 3367-153	028-625-6866
会 計 幹 事	癸 生 川 天 遊	321-0132	宇都宮市雀の宮 6-1-48	028-655-2888
"	大 谷 津 紫 水	321-0165	宇都宮市緑 4-2-21	028-658-4556
"	松 本 宜 響	321-0954	宇都宮市元今泉 2-3-6	028-634-8571
"	久 津 美 碧 洋	321-0152	宇都宮市西川田 6-3-10	028-659-4445
"	大 浦 舟 人	329-0434	河内郡南河内町祇園 2-19-410	0285-44-2180
"	吉 田 景 堂	320-0071	宇都宮市野沢町 333-6	028-665-4691
"	兼 目 悠 久	322-0045	鹿沼市上殿町 406-4	0289-65-0492
"	柿 沼 翠 流	329-2161	矢板市扇町 2-10-6	0287-44-0570
運 営 委 員	荒 井 雅 子	320-0851	宇都宮市鶴田町 2590	028-633-8771
"	齋 藤 美 与 子	320-0812	宇都宮市一番町 1-24	028-634-8979
"	高 梨 峰 鶴	321-0131	宇都宮市宮の内 3-156-5	028-654-1606
"	館 沼 天 游	321-0165	宇都宮市緑 3-12-5	028-658-9234
"	木 曾 梅 邦	321-0906	宇都宮市中久保 1-5-30	028-662-1406
"	下 司 香 雪	321-0984	宇都宮市御幸町 159-6	028-661-5380
"	山 田 雅 子	321-0951	宇都宮市越戸町 123-10	028-662-0017
"	人 見 翠 苑	321-1274	今市市栄町 2089-1	0288-26-2176
"	村 田 幽 香	324-0021	大田原市若草 1-1475-37	0287-22-5755
"	上 野 鶴 陽	323-0807	小山市城東 3-12-24	0285-23-2446
"	篠 原 珠 篁	323-0016	小山市扶桑 3-2-4 市営 26 棟 441	0285-23-3277
"	山 中 香 葉	323-0023	小山市中央町 3-3-1	0285-22-0672
"	津 久 井 悠 山	325-0043	黒磯市橋本町 8-27	0287-62-2746
"	勅使川原素山	327-0846	佐野市若松町 318	0283-23-5688
"	丸 山 暁 鶴	328-0032	栃木市神田町 3-25	0282-23-0391
"	早 乙 女 晃 楓	321-1435	日光市花石町 1963	0288-54-2531
"	石 田 鶴 邨	321-4326	真岡市島 8-7	0285-83-0734
"	川 合 峯 山	327-0311	阿蘇郡田沼町大字多田 1548-1	0283-62-1915
"	桜 井 素 玄	329-1111	河内郡河内町逆面 766	028-672-0805
"	石 川 六 涛	321-2523	塩谷郡藤原町高德 51	0288-76-2020
"	秋 山 無 涯	329-0511	下都賀郡石橋町大字石橋 213	0285-53-0571
"	石 川 露 庵	323-1102	下都賀郡藤岡町赤麻 407	0282-62-2638
"	室 井 池 水	329-2723	那須郡西那須野町南町 5-21	0287-36-6295
"	齋 藤 裕 一	324-0613	那須郡馬頭町馬頭 2060-1	0287-92-4081
"	矢 野 弓 翠	321-3531	芳賀郡茂木町茂木 1883-5	0285-63-1389
"	石 川 子 澄	321-3415	芳賀郡市貝町杉山 418	0285-68-2809